逆境を愛する男たち

小島直記

新潮社版

境を愛する男たち

島直記

新潮社版

逆境を愛する男たち

昭和五十九年三月二十日　発行
昭和五十九年五月二十日　四刷

著者　小島直記

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三(二六六)五一一一　編集〇三(二六六)五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　株式会社光邦

製本所　加藤製本株式会社

定価九八〇円

© Naoki Kojima 1984 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-308111-2 C0023

逆境を愛する男たち・目次

第一話　老いて虚しく生きず　7
第二話　古稀の人　14
第三話　異質の友を招く　20
第四話　年輪思考への疑問　26
第五話　人生の緊張感　32
第六話　若きに学ぶ　39
第七話　人品について　45
第八話　一年有半　51
第九話　読書による自己形成　57
第十話　獄中の人間学　64
第十一話　勇武より徳量の将　71
第十二話　発想と着眼　78

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十三話　鈍才の大成　84
第十四話　万物は流転する　91
第十五話　運命を決めた坂　98
第十六話　敗者復活　104
第十七話　陰徳をもって本とすべし　111
第十八話　木　鶏　118
第十九話　シンボリック・マネジャーの条件
第二十話　雷おやじの魅力　132
第二十一話　棺を蓋(おお)いて事定まるか　139
第二十二話　引退のタイミング　145
第二十三話　被疑者としての身の処し方　152
第二十四話　権力者の不明　158

第二十五話　直言居士　165
第二十六話　英雄色を好むは許されるか　172
第二十七話　花柳界管見　179
第二十八話　筆を曲げず　186
第二十九話　ペン一本を生きる　193
第三十話　真心の手紙　200
第三十一話　貧しさの中の酒　207
第三十二話　庶民への情　214
第三十三話　魂のバイブレーション　221
第三十四話　胸に響く男たち　228
あとがき　235

逆境を愛する男たち

装画　村上善男

第一話　老いて虚しく生きず

印刷した賀状の中に、手書きのものがまじっていると、なぜか心ひかれる。今年は先輩Oさんのものが、とくに心に残った。

ハガキの上半分に、自分で彫った「賀正」と「元旦」の朱色のスタンプ。その下に、

「老いは嘆くに足らず、嘆くべきは、これ老いて、虚しく生くることなり」を三行にわけて書き、

『呻吟語』――呂新吾、中国明末の人、と註がつけてある。そして、これにつづけて、

「まことに仰せの如くなれども、われ次の愚句を詠みたり。

しようことの　あるようでなし　老いの春」

この句が三行に分けて書かれ、「しようこと」に赤マルがつけてあり、上段空白のところに、

「広辞苑をみるに『しようこと』はセンコトの転。仕様事と書くのは誤り……とあり」

と註がつけられている。

Oさんは、東大を昭和九年に卒業されているから、多分七十二、三歳であろう。某省付属の研究所に奉職。定年後は悠々自適しておられる。

ときどきお会いすると、じつに柔和な表情で、狂歌のことを楽しげに話され、また碁に熱中さ

れる。勝てばよろこび、負ければくやしがる様子は、まことに天真爛漫、別れたあとも、ほのぼのとした楽しさがいつまでも消えないのである。

この賀状には、そういうOさんの心境が、さりげなく、しかし的確にのべられているようで、体温が直に伝わってくる。

ただ、「しようことのあるようでなし」には若干心にひっかかるものを感じた。狂歌も、碁も、それぞれ老境の楽しみのひとつにはまちがいないとしても、これとは別に「しようこと」を渇望しているかの感じ。そのことができないでいるために、老いの虚しさを嘆くニュアンスがある。私はここにひっかかる。

「老いて虚しく生きない」という問題を考えるたびに、よく思い出すのは、山形の守谷伝右衛門というひとである。歌人斎藤茂吉の父親。本名は、熊次郎といった。

二十三歳のとき、守谷伝右衛門の娘、十九歳のいくの婿として入籍し、明治二十七年四十四歳で家督をつぐと同時に「伝右衛門」を襲名した。

三十二歳のとき、三男坊として生まれたのが茂吉。茂吉は二十四歳のとき、同郷人で、「青山脳病院」を創立した斎藤紀一の養子となる。これは明治三十八年第一高等学校を六月に卒業し、九月に東京帝国大学医科大学に入る間の七月のことであった。

「茂吉の父」の晩年の逸話がすばらしい。結城哀草果は、『茂吉とその秀歌』(中央企画社)という本で、次のように書いている。

「お父さんは牡丹園をつくろうと思いたたれて、山形市外の元木というところの、有名な牡丹園に牡丹の種子を求めにゆかれた。芽を接ぐことによって育てる方法は、簡便で早く花が咲くけれ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ども、それでは真の愛着が起こらないばかりではなく、それ以上の珍花を求めることができないというところに、不満を感じられて種子で蒔いて育てることを思いたたれたのである。

牡丹園の主人は顎に白髭ののびた老人の姿を目のあたりに見て、

『牡丹は種子で蒔いては少なくとも五、六年を経てようやく花をもつものである。あなたの年頃ではとても骨折損になるだろう』

と真面目に忠告されたのであるが、

『その事なら承知の上だ。十年でも十五年でもかまわない、自分の死後に立派な花が咲いたらそれで本望である。自分は生涯牡丹に丹精をこめて見たいのだ』

と申されて、種子を求められた。牡丹はもう生前に立派な花を咲かせていた。肥料から栽培法までしっかり研究しておられたのには、全く驚くの他ないのである」

また、真壁仁の『人間茂吉』（三省堂）には、

「（茂吉の父は）体重は十二貫（注、四十五キロ）ほどの小男だったというが、胆剛直で意志は強靱であった。

牡丹は根つぎでは育たない。種を蒔いて育てなければならない。元木（現山形市）部落に丹野という牡丹屋がある。熊次郎は、そこへ種を買いに行った。すると、

『種を蒔いてから二十年経たなきゃ花が咲かない。すこしおそすぎはしませんか』

と主人が言う。熊次郎は怒って、

『何を仰言る。私がまもなく死ぬとでも思ってらっしゃるのか』

とやり返す。そして種を手に入れて帰る。それは生前みごとな花をつけた。大正十一年（一九二二）五月、守谷家の庭でうつした熊次郎七十三歳の写真がある。茂吉はドイツ留学中で、孫の

茂太（七歳）と並んで立っている。そばに背丈より高い牡丹の木が幾株か茂っているのが見える」

と書かれている。

ともあれ、老年において牡丹を愛した茂吉の父は、期せずして「老いて虚しく生きない」人生をつらぬいたのではあるまいか。

茂吉の母いくの死は大正二年、茂吉三十二歳のときである。

このとき茂吉は、歌集『赤光』（斎藤茂吉全集第一巻、岩波書店）のなかにある五十九首もの大作「死にたまふ母」をつくった。

岩澤正二東洋工業会長は茂吉全集の愛蔵家であるが、

「茂吉の歌の中から、お好きなのを三首選んでください」

という筆者の希望にこたえて、その一首にこの中の、

わが母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ

をあげられたことがある。

父伝右衛門の死は大正十二年（七十四歳）で、このとき四十二歳の茂吉はミュンヘン留学中で、一カ月おくれてその知らせをうけとった。

上田三四二は、『斎藤茂吉』（筑摩書房）のなかで、

「死を知って茂吉の詠んだ歌はわずかに二首である。それも、

わが父が老いてみまかりゆきしこと独逸の国にひたになげかふ

七十四歳になりたまふらむ父のこと一日おもへば悲しくもあるか

こういう、歌としては誠に通一遍のものにすぎなかった」

と書いている。（註、父を歌った『遍歴』は全集第一巻所載）

しかし、大正十四年一月に帰国した茂吉は、雑誌『改造』四月号に『念珠集』（註、全集第五巻所載）というエッセイを寄稿した。

このことについて、上田三四二は前掲文章につづけて、

「両者をへだてる十年の歳月、別してその環境の変化が歌を変えたまでであって、永別を前にした茂吉の嘆きが、父において浅かったわけではない。『死にたまふ父』の挽歌は、海の彼方にあった茂吉についに成らなかったが、帰朝後茂吉は直ちに『念珠集』一篇を編んで亡父追慕の念をいたした。十章よりなるこの随筆集は、数ある茂吉の散文のうち、もっとも精彩に富んだものである。おそらく、文章家としての茂吉の面目は勿論、歌人茂吉の秘密さえそこに明らかに現われていると思われる。（中略）『念珠集』は父恋いの書である」

と書いている。

茂吉の顔貌は、母よりも父に似るところが大きかったらしい。またその生き方のすべてに、父の影響は色濃く出ているようにおもわれるが、とくに「父」をおもわせるのは、晩年の姿である。

戦争下の昭和二十年四月十日、六十四歳の茂吉は、郷里の山形県に疎開した。

はじめ、上山町山城屋に入った。ここは、弟高橋四郎兵衛の経営する温泉旅館である。

ついで四月十四日から金瓶（かなかめ）の斎藤十右衛門宅に居をうつした。ここは、妹なをの婚家である。

ところが、二十一年一月末に、遠く最上川畔の大石田町にうつり、二月一日に、二藤部（にとべ）兵右衛門方の離家にうつり住んだ。この大石田町への疎開を、結城哀草果は「芭蕉への抵抗」であった

という（前掲書）。

茂吉は離家に「聴禽書屋」という名をつけて親しんだ。また最上川畔を散歩しては、たくさんの秀歌をつくった。

松尾芭蕉は、この土地で、

　五月雨をあつめて早し最上川

の名吟をのこしている。

彼は、元禄二年四十六歳、早春に江戸を発ち、奥羽地方を行脚して、六月ころ大石田にきて泊まり、新庄をへて最上川を船で下り、庄内に出た。右の句は、このときの所産である。

茂吉は、和歌では柿本人麿、俳句では松尾芭蕉を高く評価していた。それはいつの間にか、一種のライバル意識化していたようである。

大石田にうつったのも、芭蕉のこの名吟に「抵抗」したためで、その結果、

　最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

の秀歌が生まれたのである（歌集『白き山』、全集第三巻所載）。

このころ、茂吉は左肋膜炎にかかり、一時重態になった。しかしそのことをひとにつげることを禁じた。長男茂太にさえ知らせてはいけないといった。そうまでしての闘病と作歌精進だったのである。

この気魄によって、茂吉は元気をとりもどし、昭和二十八年七十二歳まで生きぬいたのである。再起してから長逝までの間に、

『短歌一家言』（斎藤書店）、『作歌実語鈔』（要書房）、『童牛漫語』（斎藤書店）、歌集『遠遊』（岩波書店）――以上六十六歳。

歌集『遍歴』（岩波書店）――以上六十七歳。

『茂吉小文』（朝日新聞社）、『島木赤彦』（角川書店）、新版『赤光』（千日書房）、歌集『小園』（岩波書店）、『幸田露伴』（洗心書林）、歌集『白き山』（岩波書店）、『近世歌人評伝』（要書房）――以上六十八歳。

歌集『ともしび』（岩波書店）、『校註金槐和歌集』（朝日新聞社）、歌集『たかはら』（岩波書店）、『明治大正短歌史』（中央公論社）、『伊藤左千夫』（雄鶏社）、歌集『連山』（岩波書店）――以上六十九歳。

『続明治大正短歌史』（中央公論社）、『歌壇夜叉語』（同）、歌集『石泉』（岩波書店）、歌集『霜』（同）の業績を残した。

第二話　古稀の人

親しい先輩経営者の多くが、いつの間にか七十歳代になられた。「人生七十古来稀なり」とうたった杜甫の時代とはちがって、皆さんお元気でいられるのはうれしい限りだが、中には以前にくらべて、若干弱気になられたのではないか、と感じるお方もないではない。

その方たちが、この際元気をとりもどし、背筋を伸ばしていただけばと思って、柳田国男（民俗学者）と折口信夫（国文学者）が、伊勢、大和地方を旅行したときの逸話を紹介いたしたい。

昭和二十五年、柳田七十六歳、折口六十四歳の秋である。二人は朝九時の「つばめ」の一等車で東京を発った。そのとき、折口の愛弟子だった岡野弘彦（現在国学院大学教授）は、三等車にのり、旅のお供をしたのであったが、後年『折口信夫の晩年』（中公文庫）という本の中で、二老人の旅のおもい出を書いている。その中に出てくる逸話のうち、特に紹介したいのが次のことである。

二人は十月二十五日、伊勢神宮の内宮に正式参拝した。内宮の心の御柱に深い関心をもつ柳田は、案内者の神宮文化課長来田親明に、その跡を拝見したい、と申し入れ、柱の形や建て方、その儀式などについて、細かな質問をした。心の御柱は神宮正殿の床下に築かれる。「最も神秘な場所で、古来の秘儀にわたる伝えが多いのであろう」（岡野）、柳田の質問が核心にふれてくると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com